

[報 告]

平成 23 年度 経営総合科学研究所視察報告

神 頭 広 好

本研究所の視察は、毎年名古屋校舎の文化祭の祭日を利用して、行われている。

今回は、11月4日（金）において、諏訪市のセイコーエプソン本社を訪問した。

参加した所員は、名誉研究員を含め8名である。

まず13時に上諏訪駅（写真1）に集合して、本社（写真2）の視察では13時30分から15時までセイコーエプソンの歴史を踏まえた製品の変遷についてお聞きした。



写真1 JR 上諏訪駅



写真2 セイコーエプソン本社

会社は1942年にセイコーエプソンの前身として大和工業が設立され、1959年に社名が諏訪精工舎となり、1985年に諏訪精工舎と子会社のエプソンと一緒に現在の社名になる。諏訪に立地した理由としては、昔から繊維産業が盛んなところで、腕の器用さと豊かな環境および交通条件が時計などの生産や流通に適合していたとお聞きした。

時計やプリンターなどが置かれた博物館を案内して頂き、当時としてはあまりにもアイデアのある製品が多いことと、懐かしい時計などに目が魅かれた。また、映画館の画像と同じくらいの大きさのカラープリンターにも驚かされた。総じて、製品に関する視察でしたが、若手の技術者を養成するためにコンテストが行われていることなど、若手が一生懸命に機械に集中している姿はたいへん興味深いものでした。

17時から、松本駅に近い日産の会議室において、新任のお二人の先生に現在やられている研究について発表して頂きました。テーマについては以下の通りです。

石井里枝先生：「三菱財閥の経営組織 - ミドル・マネジメントに関する検討を中心として - 」

本多 毅先生：「組織変革の多元性」

発表会は 1 時間 30 分ほど行われ、お二人の研究発表に対してたいへん興味深い意見交換がなされ、有意義な研究会でした。

今回の視察会を通じまして、参加された先生方からは、次のいくつかの意見が寄せられました。

1. 研究領域

私は経営財務論の専攻であります。経営財務論では 如何に安く資本を調達し、その調達資本を利用して 如何に高い利益を生み出すか、が問題になります。これらが問題になるのは、経営財務論が 企業が如何にして価値創造をしていくか、を追求する研究分野であるからです。

2. 今回の企業調査が長期的に研究に与える影響

今回の企業調査では、セイコーエプソンという一事例ではありますが、 に関して重要な要素となる、(1) 事業拡大の歴史的経緯を実際のセイコーエプソンの開発商品とともに視察することができました。また、(2) 商品開発において不可欠の技術力を如何にして企業内に蓄積するか、について視察することができました。

今回のような企業調査は、やや理論に偏りがちな経営財務論において、 の問題に関して、(3) 実際の企業活動の実態（現場）を踏まえて研究することが重要であることを再確認させてくれます。

以上の点において、今回の企業調査は自身の研究者としての資質を高めるものであり、有意義なものでありました。

3. 今回の企業調査が現在の研究テーマに与える影響

私は現在、企業の意思決定と企業業績の関係性について研究しております。

今回の企業調査では、セイコーエプソンがその前身である大和工業創立以降、上諏訪の地に所在し続ける合理的理由、時計事業からプリンタ事業へと事業拡大する意思決定を下す合理的理由、それらの意思決定による業績への影響を企業発展の歴史的経緯とともに視察することができました。これらは現在の研究テーマの裏付けとなる事例になるものと考えております。

4. 今回のセイコーエプソンの企業調査において、様々な知識の取得、興味深い事実の発見があり、大変有意義であった。その中でも特に関心を引いたのは技能五輪訓練である。

若手の技術者育成を目的とした技能五輪への参加を通じて、22歳以下の従業員に、自社製品の品質向上の基礎となる高度な技能取得の訓練を行わせている。これは現状の売上や利益には何も貢献しないが将来を見据えた技術レベルの底上げを通じた長期的な利益貢献を期待させる。こうした地道な投資を行うことが日本製品の高品質を維持させる重要なポイントではないかと推察される。